

真の被害者は誰なのか～相模原事件

野澤和弘 （毎日新聞 2016年10月12日「記者の目」より）

真の被害者は誰なのか

どうにも腑に落ちない。いったい真の被害者は誰なのだろうか。

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で重度の障害者 19 人が殺害され、27 人が負傷した事件から3カ月が過ぎた。神奈川県は保護者と施設の要望を受けて施設の建て替えをするという。神奈川県警は「知的障害者の支援施設であり、遺族のプライバシーの保護等の必要性が高い」と被害者全員を匿名で発表した。マスコミの報道も差別や偏見に苦しむ保護者に同情的なものが多い。

しかし、施設や保護者は被害者なのだろうか。

植松容疑者は「通り魔」ではない。事件の5カ月前まで「やまゆり園」で働いていた元職員である。勤務中には障害者に対する虐待行為や暴言もあった。なぜこんな人物を雇ったのか、どうして指導や改善ができなかったのか、なぜ犯行予告をされながら守れなかったのか。障害者は計 46 人も死傷しているのに、職員が誰もけがしていないのはなぜか……。被害者の家族がそう思ったとしても不思議ではない。

もしも保育所や幼稚園で同じような事件が起きたら、殺された子の親たちは施設の監督責任や管理責任を厳しく追及するはずだ。なぜ知的障害者施設ではそうならないのか。

着想の根にある保護者への同情

それは、親たちが望んで、あるいはやむにやまれずにわが子を「やまゆり園」に預けているからであろう。障害のある子が生まれると、親は周囲の冷たい視線にさらされながら、何もかも背負って生きなければならなかった。私自身も重度の自閉症の子の親である。恐ろしいもの、汚らわしいものを見るような視線は、親の職業が新聞記者であっても容赦はない。ストレスで心身を病んで仕事を失い、家族が崩壊するのを嫌というほど見てきた。そんな親たちを救ってくれたのが入所施設だった。

しかし、入所施設では自由やプライバシーが制限された集団生活を強いられ

る。そこで暮らすのは親ではない。

「どうして悪いこともしていないのに、こんな山奥の施設に閉じ込められなければいけないのですか」「僕はお父さんにだまされて、ここに連れてこられた」。1998年に白河育成園（福島県）という入所施設で虐待事件が発覚したとき、被害にあった障害者たちから言われた。

「やまゆり園」の障害者はそんなことは言わないだろう。それは「やまゆり園」が良い施設だからか、障害が重くて話すことができないからなのか。楽しそうな顔をしているように見えても、それは他の選択肢を知らないからではないのか。ハプニングに富んだ自由な地域生活、さまざまな人との出会いや心の交流、挑戦や冒険をして感動したり悔し涙を流したり……。そうした体験をした上で、それでも彼らは入所施設を選ぶだろうか。

親も同じだと思う。10年ほど前、元県営の入所施設の保護者会に出席したことがある。入所施設での集団生活は人権侵害だとする考えは欧米では数十年前から常識になっている。県も施設の定員を大幅に減らし、小規模で家庭的なグループホームなどに障害者の生活を移行することを計画していた。それに抵抗していたのが保護者会だとされており、県障害福祉課長とともに保護者を説得するために私は赴いたのだった。

「親はわが子のために必死になっていろんなことをやるが、それはわが子のためではなく、親が自分の安心を手に入れたくてやっていることではないのか」。そう言う私を、老いた親たちは険しい顔でにらみつけてきた。課長の話には罵声が飛んだ。それでも、重度障害者がグループホームで暮らす映像を見せたりしているうち、保護者会の雰囲気が変わった。最後には自然と拍手が起きた。

その後、100人以上の障害者が施設からグループホームなどに移ったが、行動障害があって地域での生活が難しい障害者もいるという理由で施設は存続した。全員を地域に移行させられなかったのが悔やまれる。その施設とは2013年に職員に暴行されて19歳の障害者が死亡した千葉県の袖ヶ浦福祉センターである。

親だって実はよくわかっているのではないかと思う。孤独と疎外感に苦しみ高層住宅のベランダから夜の闇を見つめた経験のある者にとって、わが子を預かってくれる相手が神様みたいに見える瞬間がある。しかし、親の安心と子の幸せは時に背中合わせになる。認めたくないだけで、親だって気づいているはずだ。そうでなければ、やっと手に入れた安住の地（入所施設）を出ようなど

と言う者に拍手などするわけがない。

「保護者の疲れ切った表情」を見て容疑者は「障害者は不幸を作ることしかできない」と考え「安楽死させる」という考えに至る。あきれた倒錯ぶりだが、保護者への同情が発信源であるには違いない。県警が被害者を匿名発表した理由も保護者への配慮である。マスコミの報道も保護者への共感である。保護者への同情や配慮や共感が磁場になっているのだ。

障害の子の存在、隠すのが救済か

しかし、被害にあったのは保護者ではない。障害のある子の存在を社会的に覆い隠すことが、本質的な保護者の救済になるとも思えない。保護者に同情するのであれば、そのベクトルは差別や偏見をなくし、保護者の負担を軽減し、障害のある子に幸せな地域生活を実現していくことへ向けなければならない。

神奈川県は施設の建て替えを決める前に、障害者本人の意向を確かめるべきではないか。言葉を解せなくても、時間をかけてさまざまな場面を経験し、気持ちを共有していくと、言葉以外の表現手段で思いが伝わってきたりするものだ。容易ではないが、障害者本人の意思決定支援にこそ福祉職の専門性を発揮しなくてどうするのだと思う。。

横浜市には医療ケアの必要な最重度の障害者が家庭的なグループホームで暮らしている「訪問の家『とも』」がある。どんな重い障害者も入所施設ではなく暮らせることを実証した先駆的な取り組みがすぐ近くにあるのに、神奈川県はなぜ学ぼうとしないのだろう。施設を建て替える予算があったらグループホームはいくらでもできるはずだ。

障害者福祉の現場は着実に変わってきたのに、神奈川県や県警やマスコミ報道がまた古い福祉の世界に障害者を封じ込めようとしているように思えてならない。

真の被害者が何も言わないから、許されているだけだ。